

2

静岡に生まれ、帝国大学工科大学造家学科を卒業した鈴木禎次は、師の勧めにより、大学院で耐震構造の研究をする。建築界では、濃尾大地震以来、その対策が求められていた。

その研究に着目した横河民輔は、禎次を三井総本店の設計に参加させ、禎次は耐震構造と大規模建築の設計実務を積む。

その後、名古屋高等工業学校建築学科の開設に備えてヨーロッパへ留学し、帰国後、教授として赴任。

15年間、教鞭を執った後、退官して設計事務所を設立した。名古屋における設計事務所の草分けといわれている。

プロフェッサー・アーキテクトを脱し、ここから専業の建築家としてのさらなる活躍が始まった。

当時、名古屋の中心部には禎次が設計した建築が44棟を数えるまでになった。

地元経済界の信頼が極めて厚く、名古屋という都市に対して、禎次の存在が大きかった証しである。

ひとりの建築家が、ひとつの都市に、これだけ多くの建築を残した例は、他にない。

“名古屋をつくった建築家”と呼ばれる由縁である。

くしくも今年、名古屋工業大学に「鈴木禎次賞」も誕生した。

今号は禎次の活躍に光を当てた。

鈴木禎次

T e i j i S u z u k i



出典：鈴木禎次及び同時代の建築家たち

卒業設計「Design for Proposed Engineering College」詳細図【部分、1896】
[所蔵：東京大学工学部建築学科]

名古屋をつくった建築家 | 瀬口哲夫 | Tetsuo Seguchi

1——大学と横河民輔の元で耐震建築を学んだ建築家

明治維新に伴い徳川宗家の静岡移封が行われ、徳川慶喜(第15代将軍)などの駿府下りに随行した人数は約6,500人といわれる。700万石から70万石に減封された徳川宗家に多くの家臣を養う力はなく、明治政府への仕官や帰農など、自立の道を模索させざるを得なかった。このような状況下で、旧幕臣・鈴木利亨^[1]は明治政府に出仕することとなり、静岡から東京に戻った。利亨の長男として静岡で生まれた鈴木禎次は、こうして東京で育ち、旧制第一高等中学校(後の第一高等学校)で学ぶことになった。この時期、禎次は江戸文学にひかれ、尾崎紅葉などが創設した硯友社の同人となり、文学に傾倒したと伝えられている^[2]。

その後、建築を志し、明治26年[1893]、帝国大学工科大学造家学科(現・東京大学建築学科)に入学する。日本の建築教育の父といわれるジョサイア・コンドルはすでに退官していたが、ゴシック風レンガ造の校舎があるキャンパスで、主任教授の辰野金吾(意匠、設計)や中村達太郎(一般構造)から本格的な建築教育を受ける。明治29年[1896]、4名の同級生^[3]とともに卒業した。

明治24年[1891]の濃尾地震の際、レンガ造の建物が大被害を受けたこともあり、西洋建築の技術をそのまま適用するだけでは不十分ということが認識され始めていた。そこで明治20年代には、レンガ壁体の鉄材による補強技術や防火床構造が展開され^[4]、日本でも耐震建築についての関心が高まっていた。こうした建築の変わり目に遭遇したことから、禎次は大学院に残り、辰野金吾の勧めもあって耐震建築の研究を行うことになった。

一方、鉄骨構造による三井総本店の設計にとりかかっていた横河民輔は、大学院で耐震建築の研究をしている禎次に目をつけ、自分の元で三井総本店の設計に参加するように誘った。この建物は、屋根と床の垂直荷重をレンガ壁の中に埋め込んだ鉄骨で支える仕組みで、建築家の設計した鉄骨構造の大建築として、明治35年[1902]に竣工した^[5]。

明治36年[1903]、横河民輔は帝国大学工科大学造家学科の講師として、日本の大学で最初の鉄骨構造の講義を行った。こうして、横河民輔の元での三井の仕事を通して、耐震構造と大規模建築物の設計実務を確かなものとしていった。

2——建築を志した義兄・夏目漱石と、文学を志した鈴木禎次

鈴木禎次は、三井就職後、旧福山藩士の中根重一の次女・時子と結婚するが、時子の姉・鏡子は文豪・夏目漱石に嫁しており、禎次は漱石の義弟になった。若い頃の漱石は建築家を志したといわれ、鏡子も、「最初は建築をやる積もりでいたことは、確かに当人の口から聞いたことがあります^[6]」と言っている。若い頃、建築家を志した漱石と小説家を志した禎次とが、義兄弟になったのも偶然とはいえ、相互に良い影響を与えたに違いない。禎次の実家は本郷西片町にあったが、漱石一家も明治39年[1906]から翌年にかけて西片町に住んでおり、両者は親しく行き来していた。「西片町の家というのが鈴木のお父さんの居られる家とすぐ目と鼻の間なので、名古屋から上京して来ると、夜などよくぶらりと訪ねて来たものです。そうして机の上のノートの細かい字を見て驚きながら訊ねるのです^[6]」と鏡子が書いている。漱石の家を訪ねた時に、赴任先の名古屋駅前の情景を話したのであろうか、名古屋を訪れたことがない漱石が、小説『三四郎』で、主人公の三四郎が九州から上京の途次、名古屋で途中下車し、駅前の旅館に泊まる話があるが、そこに当時の名古屋駅前の描写がなされている。これは、義弟である禎次からの話による^[2]といわれている。漱石は明治33年[1900]9月、横浜港から英国留学に出发した。が、翌年、禎次夫婦は漱石に「雑誌『太陽』を送るから、絵葉書を20円ばかり買って送ってほしい^[6]」という主



鈴木禎次の似顔絵 | 英国留学中に下村観山が描いた禎次の顔。特徴がよく出ている
[出典：「建築雑誌」第215号、1904.11]



夏目漱石の墓標 | 禎次は夏目漱石の義弟にあたるため、1916年12月、漱石が亡くなった時、義姉・鏡子は葬儀の段取りを禎次に任せた。雑司ヶ谷のお墓についても、「妹婿の鈴木が建築師であるのをさいわい、すっかり設計をまかせてしまいました。なんでも、西洋の墓でもなし、日本の墓でもない。たとえば安楽椅子にでもかけたといった形の墓をこしらえようというので、まかせきりにしておきますと、できあがったのが、今のお墓でございます」と言っている[夏目鏡子「漱石の思ひ出」]

1——利亨は、明治政府にあって、最後は、大蔵省銀行局長を務めたという。退官後は、帝国商業銀行専務に就任。建築家となった禎次は、帝国商業銀行本店を設計しているが、こうした縁であろう

2——「日本の建築 明治大正昭和 様式美の挽歌」伊藤三千雄・前野義著[三省堂 / 1982]

3——同級生の堀池好之助は海軍、福岡常治郎は消防庁へと官庁に奉職している。この時期の工科大学造家学科の卒業生は、1879年の第1回卒業の辰野金吾を含めた4名以来、16年間に、わずか46名しかいない。卒業が1名の時もあり、1学年平均3人弱という少人数教育であった

4——「近代日本建築学発達史」日本建築学会編[丸善 / 1972]

5——禎次は三井総本店に引き続き、三井大阪支店や北浜銀行本店などの建築を手がけている

6——「漱石の思ひ出」夏目鏡子述、松岡謙筆録[岩波書店 / 1929]



上——**鶴舞公園噴水塔** | 1910年開催の第10回関西府県連合共進会の永久施設として、名古屋開府300年記念会が企画したもので、設計を楨次に依頼。博覧会会場の正面につくられた。小高く土盛りしたところに高さ9mの噴水塔をつくり、円形の池を張り出した長方形の池を正面に配す。噴水塔は、8本のドリス式の大理石製丸柱のあるローマ様式の堂々としたもの。現在、噴水塔背面に半円形の池があるが、共進会後の鶴舞公園整備によって付加された(名古屋市指定文化財)

下——**奏楽堂** | 噴水塔と同じ趣旨で、博覧会会場につくられた。八角形の基壇の上に、イオニア式柱を2本一組にして8基建て、屋根窓のあるドーム状の屋根を支える。ハープ形の屋根飾りと軒先の照明器具が外観を特徴づける。基壇の手摺の模様は、「君が代」の楽譜になっている。基壇の下に楽団控室があった。奏楽堂は本造であったため腐朽が激しく、1934年に取り壊され、別のデザインで再建されたが、1997年に楨次のデザインに復された

7——下村観山[1873-1930] 本名は晴三郎。東京美術学校(現・東京藝術大学)第1回卒業で、卒業後、美術学校助教授。1903年から1905年にかけて、文部省給費留学生として英国留学。日本美術院の創設に尽力した日本画家

8——中條精一郎[1868-1936] 1898年、帝国大学工科大学造家学科を卒業。1903年から1907年まで英国留学。帰国後、曾禰達蔵と曾禰中條建築事務所を開設する。慶應義塾大学図書館や米沢市上杉記念館などの作品がある

9——塚本靖[1869-1937] 京都生まれ。1893年、帝国大学工科大学造家学科を卒業。1899年から母校の助教授として辰野金吾を支える。作品に京城停車場本屋、東京帝国大学工学部講堂、教室などがある

10——「会員異動動静/消息」『建築雑誌』第220号、1905.4

11——「建築学会創立50周年記念回顧座談会」『建築雑誌臨時増刊号』第617号、1936.10

12——鶴舞園内を5区に分け、天寿園(英字形の道路、浪越川)、地寿園(大運動場)、風寿園(丘山、泉鳥飛瀑、奏楽堂)、山寿園(浪越山、龍ヶ池、望府台、日本式庭園)、水寿園(十字池、芝庭)をつくる和洋折衷式の庭園計画であった(『名古屋都市計画史・上巻』名古屋建設局編[名古屋建設局/1957])

13——「名古屋市史・地理編」名古屋市編[名古屋市/1916]

14——名古屋では1879年、大須門前町に開設された浪越公園が最初の公園。1914年、名古屋市の公園として再スタートし、那古野山公園と改称された

15——今に残る鶴舞公園の噴水塔(市指定文化財)と奏楽堂(1997年復元)は、名古屋市民の目を楽しませている。鶴舞公園全体は、国登録記念物

16——拙著「名古屋をつくった建築家・鈴木楨次」[C&D出版/2004]

旨の手紙を出している。絵葉書を通して、英国の建築を知ろうとしたのであろう。

楨次は明治36年[1903]1月、漱石と入れ違いのかたちで横浜港より讃岐丸に乗船し、留学のために欧州へ旅立つ。そして、英国滞在に慣れてきた明治37年[1904]の夏、グラスゴーなどの諸都市を旅行している。さらに9月には、同じ留学生の下村観山^[7]と共に、ケンブリッジ留学中の一高・工科大学の同窓生である中條精一郎^[8]を訪ね、テム川での舟遊を楽しみ歓談したと、1年先輩で工科大学造家学科助教授の塚本靖^[9]に便りしている。明治38年[1905]2月頃にパリへ移動。パリからの便りで、楨次は、「美人がいれば、美なる観念も養われ、それゆえに建築が美しいと思うがどうか。しかし、フランスの建築は御化粧した美人の如しさね」^[10]とやや批判的な主旨の意見を述べている。

日本の近代建築家の第1世代にあたる辰野金吾らと異なり、楨次の世代にとってヨーロッパは、単に建築の様式を無批判に学ぶ対象ではなく、客観的に観察する対象となっている。いずれにしろ、欧州留学は、楨次にとって、工科大学で学んだ西洋建築の知識を実地に確かめることができ、自分の能力に自信を持たせたに違いない。

3——成長する名古屋が求めた建築家

明治39年[1906]6月、鈴木楨次は3年半に及ぶ欧州留学から帰国し、前年に新設された名古屋高等工業学校(以下、名高工/現・名古屋工業大学)建築科教授、建築科長として赴任した。この時、満36才。当時、名古屋は駅前に木造3階建ての旅館が何棟も並び、繁華街の栄町(現・栄)まで路面電車が走る人口約31万人の都市であったが、ロンドンやパリに留学を経験した楨次にとって満足できる街ではなかった。それだけに自分の力を発揮できる格好の地と映ったに違いない。設計の最初のチャンスは、明治43年[1910]の第10回関西府県連合共進会である。この時の経緯について、楨次は「丁度名古屋に居て、学校に居りましたが色々御相談を受けました。結局、博覧会の木造建築も急いでやると云うことは逆も出来ない相談ですから、丁度東京の中條精一郎君と云う人に頼んだら宜かろうと云うので、中條君が引受けました。そうしてあとに残るものだけを私がやると云うことになりました、併しそれは噴水塔と奏楽堂だけです」^[11]と語っている。中條精一郎は、大学時代からの親友であるとともに、英国留学中、歓談した仲である。

明治43年の春、曾禰中條建築事務所設計の近世ルネサンス式のパビリオンが姿を現すと同時に、名古屋の目抜き通りに楨次の設計した複数の建物が姿を現した。すなわち、栄町に名古屋で最初のデパートメントストア・いとう呉服店、大須では共進会のサブ会場に位置付けられた愛知県商品陳列館、本町通では桔梗屋呉服店などである。いずれも木造ながらルネサンス風意匠の白い大建築で、市民の目を驚かせた。まさに、名古屋の都市景観を一新させるものであった。

共進会会場として使用された鶴舞公園は、当初設計^[12]から、敷地の一部を割譲するなどの変更があったため、改めて楨次に設計が依頼された。楨次案は、自らが設計した噴水塔と奏楽堂を結ぶ線を軸線とし、噴水塔を中心にはほぼ円形の周回道路と放射道路を設け、軸線の南側を洋風庭園とし、北側を日本庭園(春景庭、夏景庭)とする公園^[13]で、名古屋市内で最初の大規模な和洋折衷公園^[14]となった。こうして、楨次の設計により、繁華街の新しい都市景観とともに、噴水塔と奏楽堂^[15]のある、市民の憩いの場となる大公園がつくられた。欧州留学の成果が名古屋の地で花開いたのである。後年、楨次は子どもや孫を鶴舞公園に連れて行き、「どうだ、いいだろう」と言っていた^[16]というから、それらは若き日の自慢の作品だったのであろう。楨次は、名古屋の成長と共に活躍の場を与えられ、建築家として成長していったのである。

4——百貨店建築の名手

鈴木楨次は、名古屋の経済界から信頼を得たが、中でも、松坂屋創業者・伊藤次郎左衛門

^{つけたみ}

祐民の信頼が最も厚かった。明治11年[1878]生まれの祐民は、若いだけに進取の気性に富んでおり、江戸時代初期から続く、いとう呉服店を発展させ、名古屋で最初のデパートを開店した。楨次はその期待に応え、室内庭園、屋上庭園のあるデパートを登場させた。その後、東京、名古屋、大阪の店舗名称が異なるため、松坂屋に統一された。

松坂屋上野店の再建にあたって新しい構想を得るため、楨次は大正14年[1925]12月から5ヵ月間、アメリカの商業事情視察を行っている。西海岸のサンフランシスコを始めとし、シカゴ、デトロイト、ニューヨーク、フィラデルフィア、ボストンとアメリカの主要都市をまわり、各地の最新の商業施設やエレベーターメーカーのオーチスの工場などを視察している。百貨店は常に新しいデザインや流行する機能を取り入れることが要求され、その性格から、最新設備を備えた大規模建築となる傾向がある。こうした時代の要請に応え、楨次は帰国後、東京、名古屋、大阪を始め、全国の松坂屋の建物を次々にRC造化する。これらの活躍は、「百貨店建築の名手」にふさわしいものであった。楨次の設計人生の大半は、松坂屋百貨店の設計に捧げられたといっても過言ではない。

5——都市に風格をもたらした銀行建築

鈴木楨次の設計は、名古屋銀行、伊藤銀行、浜松銀行、中埜銀行の本支店など、銀行建築が多いことでも有名であるが、そのほとんどは地元経済人からの依頼による。楨次の銀行建築の多くは、ジャイアント・オーダーのある古典様式を基本としている。しかし、単に古典様式をこなすというだけでなく、新しい建築技術の導入も積極的に行っている。例えば、大正2年[1913]の共同火災名古屋支店は、名古屋で最初のRC造建築^[17]であり、大正4年[1915]の北浜銀行名古屋支店は八層閣ともいわれ、名古屋で最初の高層建築で最上階に展望レストランがあった^[18]。楨次が設計した銀行建築は、名古屋だけでなく、岡崎、一宮、半田などの都市においてもつくり、それぞれの都市に風格をもたらし、街角を飾った。

名古屋の経済人からの信頼は、彼らの自宅の設計にも及んだ。名古屋商工会議所会頭の上達^{かど}の野郎、半田の有力者の旧中埜家住宅、桑名の山林王の諸戸氏庭園本邸(主屋)洋室、伊藤次郎左衛門祐民の別荘・揚輝荘伴華楼、名古屋瓦斯重役の岡本邸などがある。

6——名古屋に巨大な足跡を残した

鈴木楨次は大正10年[1921]に名高工を退官するまで、建築の教育者としても若き建築家を数多く育てた^[19]。その多くは、全国各地で建築家として活躍した。楨次の元で育った建築家としては、島武頼三^[20]と佐藤三郎^[21]、日本郵船などの船の内装で力量を発揮した中村順平^[22]、三井物産門司支店などを設計した松田軍平^[23]、昭和初期の名古屋においてモダニズム建築の名手と言われた城戸武男^[24]、戦後、日建設計の社長となった伊藤鑑一^[25]などがいる。

楨次の設計した建築の数は80棟にも及び、その半数以上が名古屋を中心とする東海地方にあり、なかでも名古屋には44棟と集中しており、そのほとんどが、目抜き通りにあたる広小路通を中心に点在している。日本の大都市で、これほど一人の建築家に依存した都市は極めて珍しいといえる。名古屋にとっての建築家・鈴木楨次の存在は、成長する名古屋にとって欠かせない建築家であっただけでなく、まさに、「名古屋に育てられ、名古屋をつくった建築家」といえるであろう。

せぐちつお——名古屋市立大学院芸術工学研究科教授/1945年生まれ。名古屋大学建築学科卒業、東京大学工学系大学院修士課程、博士課程修了。工学博士。歴史的建造物を活かしたまちづくりに関心を持って研究している。なかでも、近代建築、およびそれらを設計した人々、鈴木楨次や東海地方の建築家について、調査研究を行っている。主な著書:「名古屋をつくった建築家・鈴木楨次」[C&D出版/2004]、「わが街ビルヂング物語」[樹林舎/2004]、「官庁建築家・名古屋市建築課」[C&D出版/2009]など。



名古屋銀行本店 | 1926年に竣工したSRC造5階建てで、楨次の代表的作品のひとつ。正面に4層分のジャイアント・オーダーのイオニア式円柱が並ぶ。銀行建築の例にもれず、内部に1、2階分の吹き抜け空間があり、周囲にギャラリ―をまわす(現在は、ふさがれている)



鈴木楨次記念碑 | 楨次は1921年、名高工を退官したが、これまでの建築教育に対する功績に対し、従四位勲四等に叙せられた。これを機縁に、教え子たちが中心になって名高工構内に記念碑を建立することし、1924年3月9日、第1回卒業生の桃井保憲の司会で除幕式が行われた。幅460cm、奥行き280cmの基礎の中央に、2本のイオニア式円柱とエンタブラチュアからなる記念碑を建てる。記念碑の高さは約392cm。記念碑には、「TO COMMEMORATE THE MERIT OF PROF. SUZUKI, OCT. 1923」と記してある。その石の上に芸術で勝利を取ったものを象徴する、青銅製の月桂冠があった。様式建築を愛した楨次を記念するにふさわしいものである。太平洋戦争時の名古屋空襲で被災したため、1948年、復旧されたが、建築学科の校舎位置が変わったため、記念碑の位置も変更された。しかし、月桂冠は復元されなかった

17——共同火災名古屋支店は、1912年起工し、翌年に完成した3階建てで、ドームのある塔屋を持つ。ウエブ材などで骨組みを組み、その周りにコンクリートを流す工法が用いられている。名古屋で最初のRC造建築とされている(『東海の明治建築』日本建築学会東海支部編[名古屋鉄道/1968]など)

18——北浜銀行名古屋支店は、エレベータを備えていた

19——名高工退官後、キャンパス内に功績を記念して、記念碑が建立された。これは、名古屋工業大学内に現存している。

また、名古屋工業大学創立100周年を記念して、2009年、鈴木楨次賞が設けられた

20——島武頼三[1894-1947] 大阪生まれ。1916年、名高工建築科を卒業。伊勢久などの作品がある

21——佐藤三郎[1896-1974] 名古屋生まれ。1918年、名高工建築科を卒業。大垣市立図書館や愛知中学校本館などの作品がある

22——中村順平[1887-1977] 1920年、名高工建築科を卒業。曾禰中條建築事務所に入所。その後、フランスのエコール・デ・ボザールで学ぶ。1925年、横浜高等工業学校(現・横浜国立大学)建築科主任教授となる。客船・福原丸やリオデジャネイロ丸などの内装設計を行った特異な建築家

23——松田軍平[1894-1981] 1918年、名高工建築科を卒業。コーネル大学で建築を学び、トロロープリッジ&リヴィングストン建築事務所勤務

[[INAX REPORT]No.178参照]

24——城戸武男[1899-1980] 1920年、名高工建築科を卒業。福寿生命、中北薬品などの作品がある

25——伊藤鑑一[1900-87] 1918年、名高工建築科を卒業。長谷部竹腰建築事務所を経て、日建設計工務(現・日建設計)。後に社長を務める

旧中笠家住宅

竣工年:1911年

所在地:愛知県半田市天王町1-30
規模:地上2階|構造:木造
国重要文化財



2



3



4

1—客室:第10代中笠半六がイギリス留学中に見た木造住宅の美しさにひかれ、そのような住宅をつくりたいと積次に設計を依頼したとされる邸宅で、1911年5月上棟の様札がある。客室内は、白大理石の暖炉、2本の角柱とその上に載るエンタブラチュアからなる窓周り、天井コニス、天井の大きな丸い花飾り、中心飾りと格調高く出来上がっており、半六も満足したに違いない。現在、1階は「紅茶専門館 T's CAFE」、2階は桐華学園の和室として使用されている

2—南側全景:南庭に面して、出窓とベランダがある。鱗形や角形の天然スレートで葺いた急勾配の屋根を持つ。白い壁面の外側に、柱、梁、斜材を現したハーフトンバー様式。軽快なリズム感のある住宅である

3—玄関:明治建築らしく、玄関扉は内開き。扉の組子は、円形でアールヌーボー風意匠となっている

4—暖炉:各室に異なる暖炉が付く本格的な洋風住宅。客室のマントルピースは白大理石で、炉前床のタイルは深紅、ストーブは曲線のあるアールヌーボー風

岡崎銀行本店

(現・岡崎信用金庫資料館)

竣工年:1916年

所在地:愛知県岡崎市伝馬町1-58

規模:地上2階 | 構造:レンガ造(RC造で構造補強)
国登録文化財



2



3

1—南西の交差点から見る・屋上のドーム、岡崎産の白御影石と赤レンガのコントラスト、開口部などに採用されている形態の多様さを上手にまとめている。その結果、賑やかさと華やかさがある建物となっている。植次の設計の特徴がよく現れている

2—南側全景:中央部は、1階半分の2本の柱と櫛形のベデメントを採用しており、重厚さが演出されている。左右は、パラペット、ベデメント、開口部などに、種々の形態要素を用いているが、絶妙なバランスが保たれているところに、植次の設計の冴えが見られる

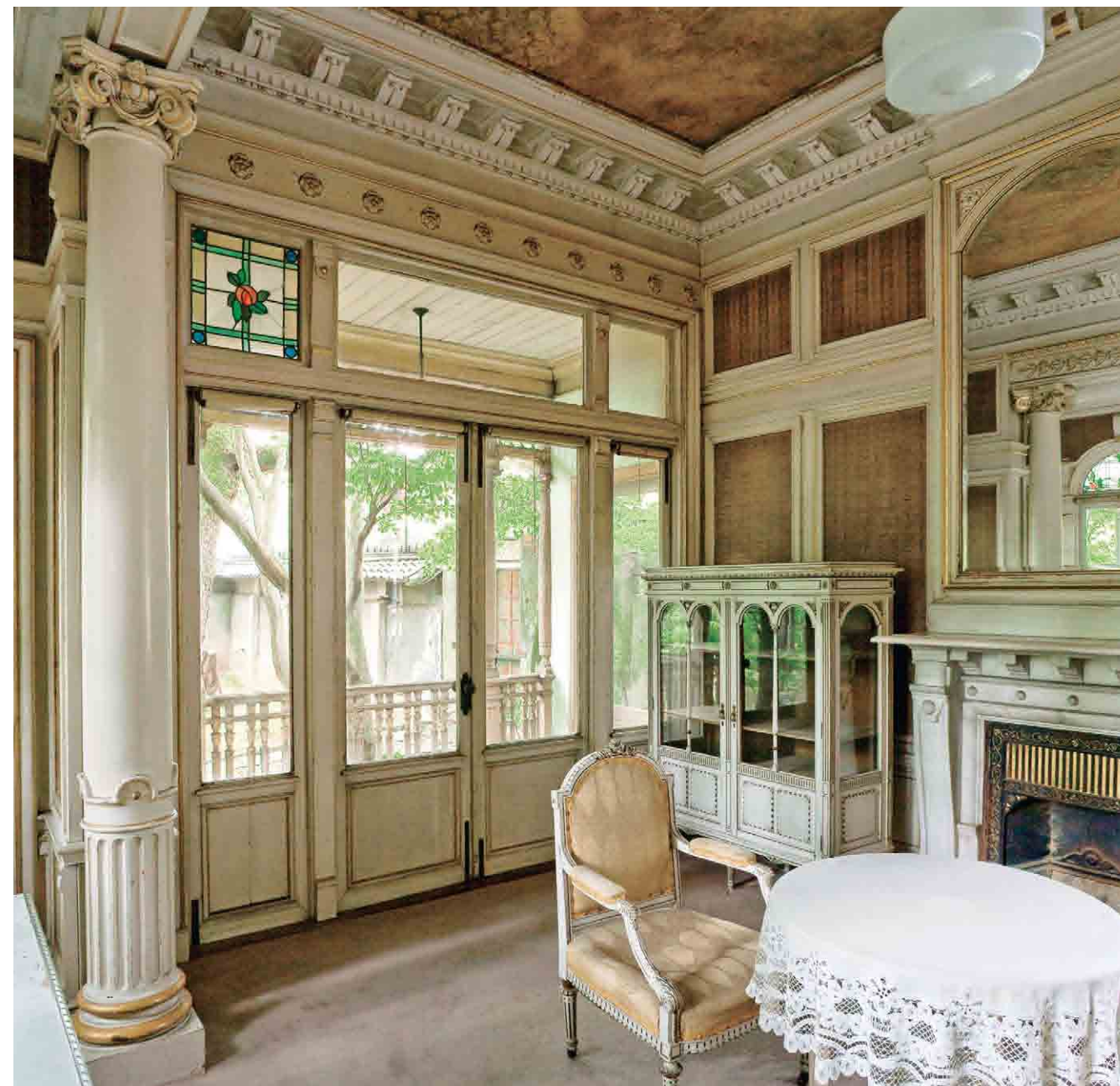
3—2階窓周り見上げ:植次は、家族への手紙に、「Tの字」を書いたという。そのせいであろうか、岡崎銀行本店や名古屋銀行本店など、植次の作品に、「T」の字を見つけることができる。江戸っ子である植次の洒落さがさせた行為であろう。旧中惣家住宅を使用している喫茶店は、くしくも「T's CAFE」と名付けられている



諸戸氏庭園本邸(主屋)洋室

竣工年:1917-18年

所在地:三重県桑名市 | 規模:地上1階 | 構造:木造
国重要文化財 | 春・秋に庭園のみ公開



2



3

1—ベランダ:明治期、初代諸戸清六[1846-1906]が江戸時代の山田彦左衛門屋敷を購入して整備した邸宅。これを諸戸精太が引き継ぎ、大正期になって徐々に設計を依頼し、主屋に付属する洋室が増築された。タイル張りのベランダを介して、江戸時代に作庭された旧山田氏林泉につながる

2—室内:小さい洋室であるが、植物模様の天井布、歯飾りの付いたコーニスや持ち送り、イオニア風の2本の独立柱、ステンドグラスを入れた4つのアーチ窓(写真手前/暖炉上の鏡に映っている)、白大理石のマンテルピース、金で縁取りされた木部など、密度の濃い設計となっている。珠玉のような部屋である

3—東側外観:ベランダは、エンタシスの円柱、吹寄せにされた手摺、欄間の等間隔の組子など、端正なデザインでまとめられている。現在、諸戸氏庭園は建物の修復や環境整備が行われている



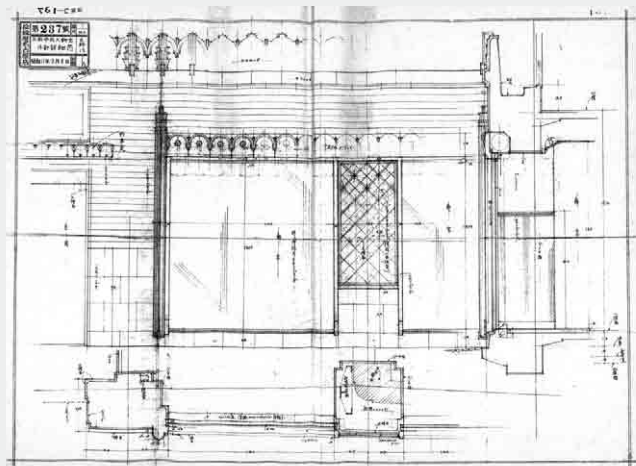
松坂屋本店

1924年、いとう呉服店は南大津町で新店舗の工事を始め、翌年、地下2階、地上6階、延べ床面積約2万㎡の建物を完成させた。6階に宴会場、ホール、屋上に庭園、動物園、水族館、さらに9階の高さの位置に展望室(眺望閣)が設けられた。開店に先立ち、2月の総会で新店舗の開業を機会に各店舗の名称を「株式会社松坂屋」に統一することとした。さらに1937年に増築をし、地下2階、地上7階、一部8階建て、延べ床面積約3万3千㎡の大規模百貨店となった。

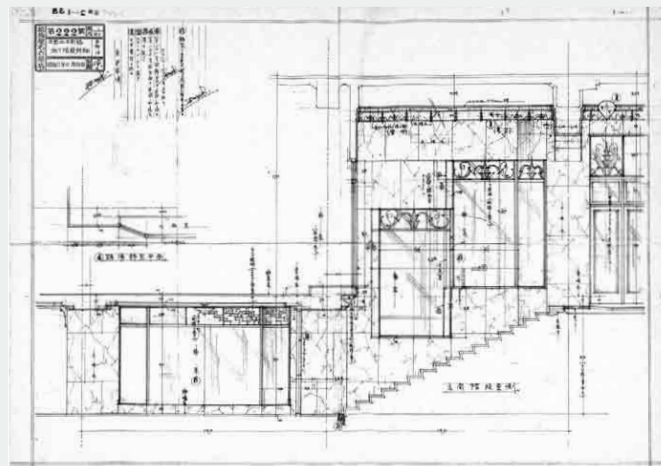
竹中工務店の創業者・竹中藤右衛門は、三井の小野浜倉庫(神戸)の顧問であった禎次の知遇を得る。竹中家は、名古屋開府以来、松坂屋・伊藤家の仕事を引き受けている家柄。ということで、禎次からの信頼が厚く、彼の主要な建物の施工は、竹中工務店が一手に引き受けた

1—正面中央大飾窓外部詳細図:大津通り側のショーウィンドウ外観。ホワイトブロンズ製の窓枠やテラコッタ製のコーニスにアール・デコ風の意匠が採用されている | 2—正面北玄関脇地下階段詳細:階段脇に取り付けられたショーウィンドウの意匠。草花模様や幾何学的模様を用いて華やかさが演出されている。壁面は大理石張り。禎次の図面には、アルファベットで「Sudzuki」と表記する署名が入っている。発音に凝った禎次らしいこだわりである[1936][所蔵:松坂屋]

写真:松坂屋/撮影:1937年



1



2

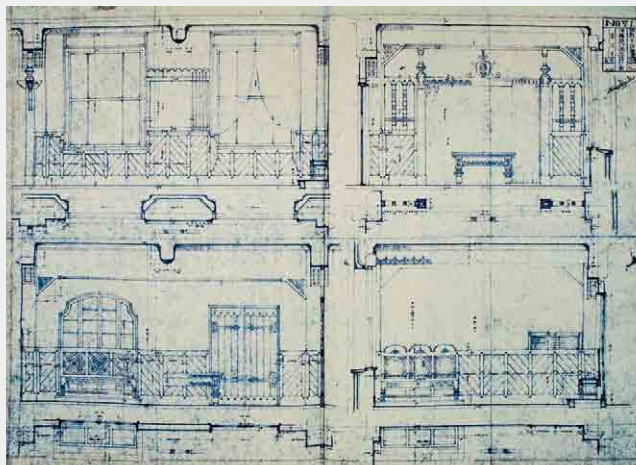


伊藤銀行本店

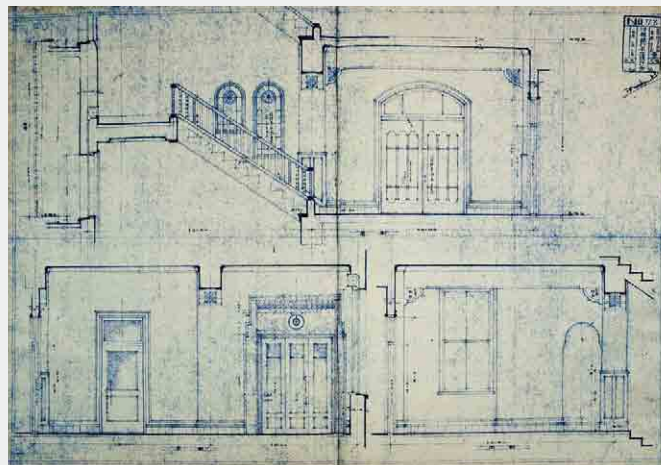
伊藤銀行は1881年、伊藤家の屋敷の一郭を使って創設された私立銀行。1930年、本店はRC造の地下1階、地上4階建て、石張りのローマ風の建物に改装された。玄関を入るとギャラリーのある吹抜けの銀行営業室、3階には談話室、集會室、球戯室、4階には総會室、ホール、迎賓室、屋上には芝生庭と展望台がある。談話室は英国風、総會室は桃山風、迎賓室は中国風など、日中欧の多彩な意匠が楽しめる空間となっている

3—3階球戯室詳細図:天井下のコーニス、斜め板張りの腰壁と、落ち着いた英国風意匠の空間となっている。球戯室への扉は、全物付の重厚な板戸 | 4—3階その2西階段室詳細図:本町と茶屋町の交差する東南隅に玄関を置く。玄関正面にあたる西北隅に金庫、西階段、エレベータを、さらに、玄関右手の東北に階段を配置する。図面は、奥の西階段とエレベータ周りの詳細を表している。勾配の緩い階段、ステンドグラス入りの窓が特徴[1929][所蔵:竹中工務店]

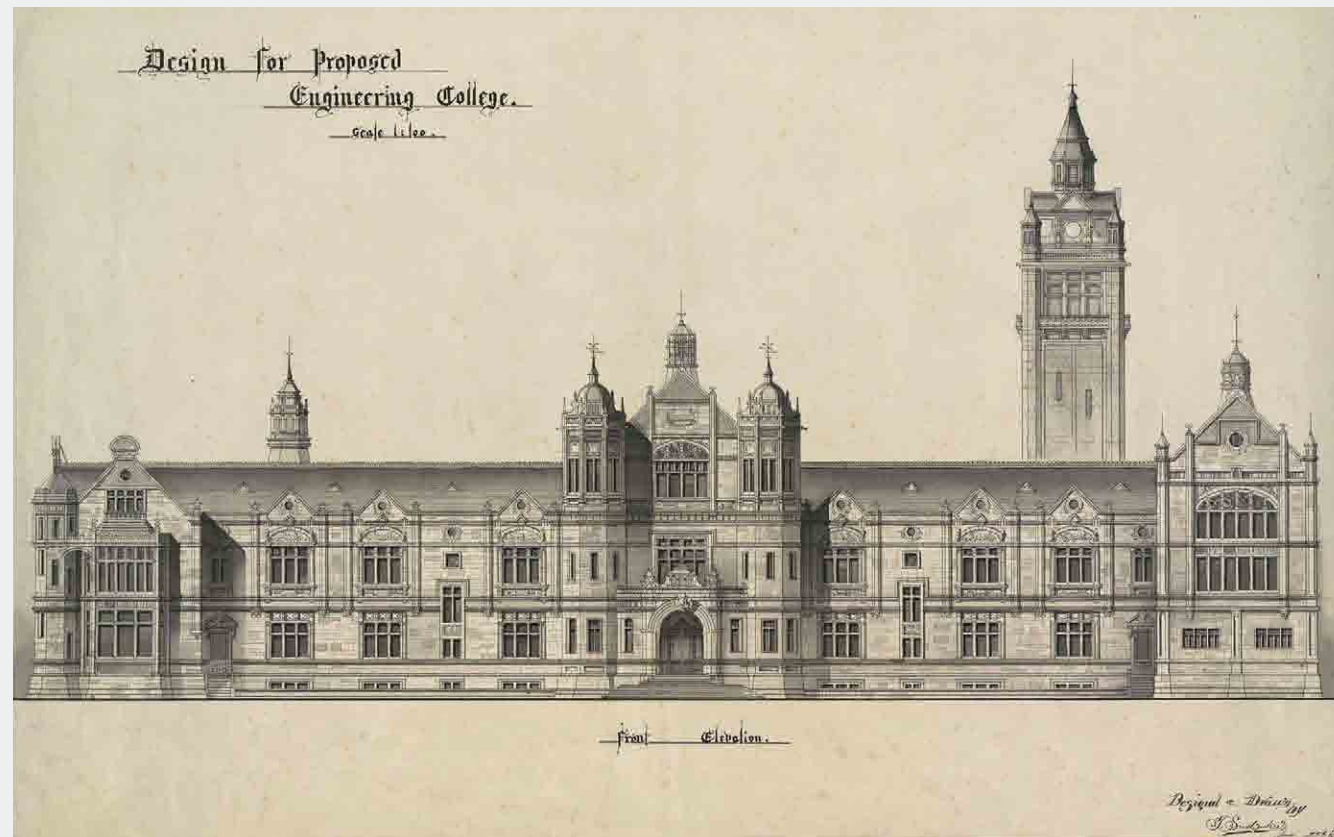
写真:松坂屋



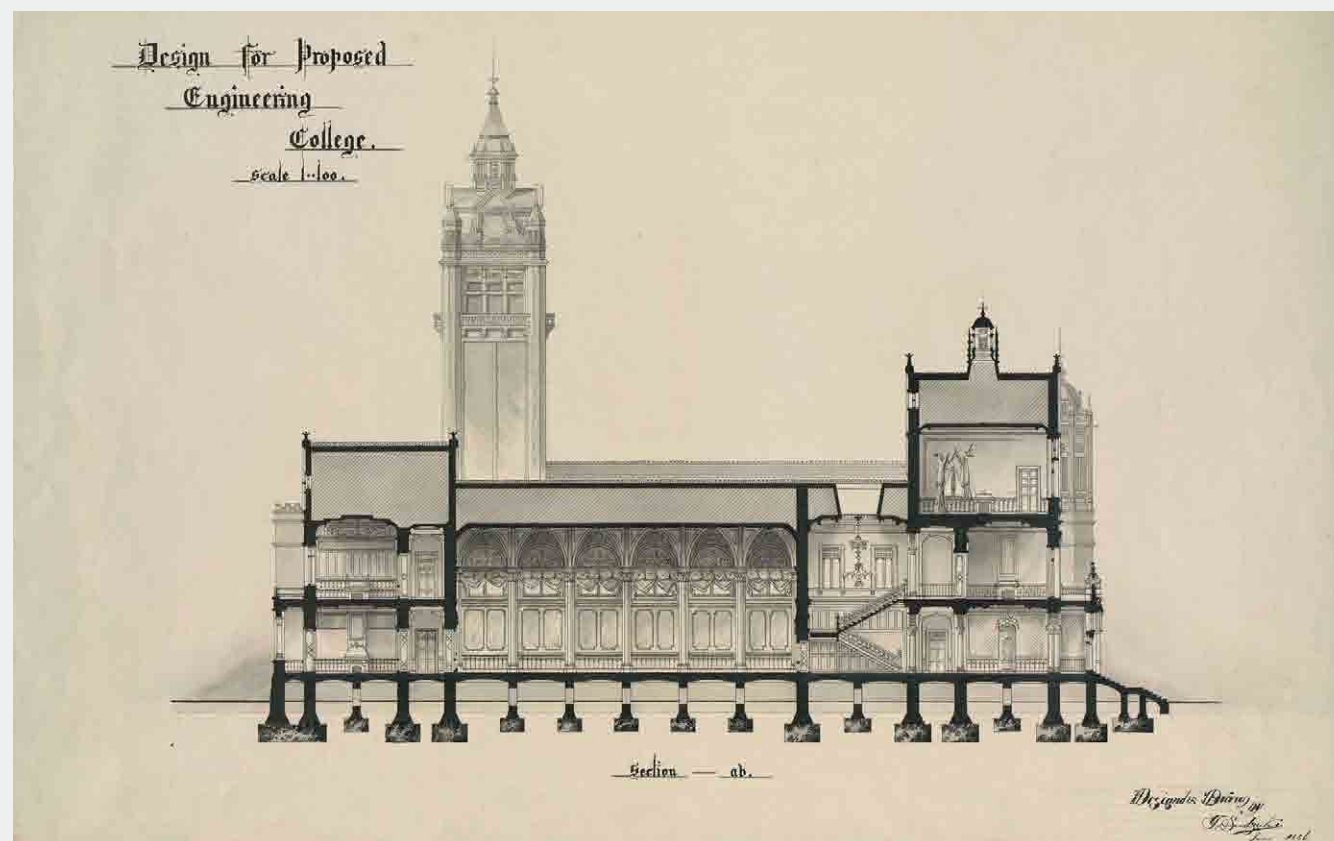
3



4



5



6

5—卒業設計「Design for Proposed Engineering College」正面図:英国風の塔のある工科大学校舎。正面中央は、左右対称に3つの塔を配置するが、全体では左右でバランスを変えるという手堅い設計になっている | 6—同断面図:正面の階段を上がり、前に進むと、天窗からの採光で明るい階段室に出る。この建物の中心は、2階分の高さのある大ホールで、ゴシック風の尖りアーチと細い柱、大理石張りと思われる壁など華麗な雰囲気が出されている[1896][所蔵:東京大学工学部建築学科]

略歴 | Biography

明治3年[1870] 7月6日、静岡に生まれる。鈴木家は旗本の家系。父・鈴木利亨は大蔵省役人
 明治26年[1893] 第一高等中学校を経て、帝国大学工科大学造家学科入学
 明治29年[1896] 帝国大学工科大学造家学科卒業。卒業設計「Design for Proposed Engineering College」。大学院に残り、耐震構造を研究
 明治30年[1897] 三井に就職。三井総本店の設計を分担(横河民輔を補佐)
 明治31年[1898] 10月頃、三井大阪支店の設計監理で大阪へ赴任
 明治33年[1900] 9月、義兄・夏目漱石が英国留学に出发。漱石の滞英中、楨次は雑誌「太陽」や「読売新聞」などを送り、漱石は英国の建築雑誌「Studio」、「Academy Architecture」などと美術雑誌を送っている
 明治35年[1902] 文部省から欧州留学を命ぜられる
 明治36年[1903] 1月7日、横浜出航、英国へ向かう。妻・時子の実家を留守宅とする。5月、島村抱月らとオックスフォードを訪問

明治37年[1904] 7月、英国北部を巡り、8月、グラスゴー訪問。9月、下村観山とケンブリッジ留学中の中條精一郎を訪ねる
 明治38年[1905] 英国よりパリへ移る。北欧を訪ねる
 明治39年[1906] 6月11日、フランス、ドイツ、イタリア、アメリカをまわり帰国。名古屋高等工業学校へ赴任。教授、建築科長を命ぜられる
 明治43年[1910] 3月、第10回関西府県連合共進会開催。10月1日、伊豆修善寺で病臥中の漱石を見舞う
 大正5年[1916] 12月12日、夏目漱石葬儀の総括責任者を務める
 大正6年[1917] 建築学会会館建築委員会委員
 大正9年[1920] 11月、都市計画愛知地方委員(大正10年9月まで)
 大正10年[1921] 名高工退官。従四位勲四等。その後、鈴木建築事務所開設
 大正13年[1924] 3月、名高工構内に鈴木楨次記念碑建立。9月1日、関東大震災
 大正14年[1925] アメリカへ出張、百貨店建築などを視察

昭和2年[1927] この年まで名高工の非常勤講師
 昭和3年[1928] このころ、名古屋市公会堂建築顧問。11月、第4回建築懇談会講演(中央建築会主催)「名古屋と建築」
 昭和5年[1930] 名古屋市庁舎建築設計懸賞図案審査員
 昭和6年[1931] 4月5日、建築学会東海支部創立記念会講演「名古屋に於ける建築の今昔感」
 昭和10年[1935] 2月13日、建築学会創立50周年記念回顧座談会(第2回)に出席
 昭和11年[1936] 春、名古屋汎太平洋平和博覧会展示館の設計競技審査員。10月、「建築雑誌」臨時増刊号で、三井総本店の設計や明治末期の関西地方の建築を回顧している
 昭和15年[1940] 4月、愛知時計電気(株)建築顧問。6月、鈴木建築事務所を東京へ移転
 昭和16年[1941] 8月12日、逝去(71歳)

主な作品 | Works | ●印は現存せず

明治34年[1901] 三井大阪支店●(横河民輔と共同設計、大阪)
 明治35年[1902] 三井総本店●(横河民輔の設計補佐、東京)
 明治37年[1904] 北浜銀行本店●(大阪)
 明治40年[1907] 日本第一麦酒半田醸造工場増築(愛知)
 明治43年[1910] いうと呉服店●(愛知) | 桔梗屋呉服店●(愛知) | 愛知県商品陳列館●(星野則保と共同設計、愛知) | 鶴舞公園奏楽堂(復元)噴水塔(愛知)
 明治44年[1911] 名古屋銀行京都支店●(京都) | 後藤邸●(愛知) | 上遠野邸●(愛知) | 旧中整家住宅(愛知)
 明治45年[1912] 大阪合同紡績●(大阪) | 名古屋電灯本社●(愛知)
 大正2年[1913] 三井銀行名古屋支店●(愛知) | 共同火災名古屋支店●(愛知) | 共同火災神戸支店●(神戸) | 橋本邸●(大阪)
 大正3年[1914] 名古屋銀行堀川支店●(愛知) | 川崎銀行大阪支店●(大阪) | 三井銀行京都支店●(京都) | 愛知農工銀行●(愛知)
 大正4年[1915] 北浜銀行名古屋支店●(愛知)
 大正5年[1916] 名古屋銀行南支店●(愛知) | 岡崎銀行本店(愛知) | 帝国商業銀行本店●(東京) | 好生館●(愛知)
 大正6年[1917] 松坂屋いうと呉服店上野支店●(東京) | 鳥羽邸●(三重) | 滝定商店大阪支店●(大阪) | 東陽倉庫●(愛知) | 滝定東京支店●(東京) | 夏目漱石墓標(東京)
 大正7年[1918] 名古屋瓦斯(株)工場(愛知) | 中島男爵大磯別荘●(神奈川県) | 諸戸氏庭園本邸

(主屋)洋室(三重)
 大正8年[1919] 名古屋銀行大阪支店●(大阪) | 帝国撫糸会社●(愛知) | 日本車輛(株)機関車庫●(愛知) | 橋本邸●(大阪) | 十一屋呉服店●(愛知) | いうと呉服店鍛冶屋町舎宅●(愛知)
 大正10年[1921] 伊藤銀行中支店●(愛知) | 十一屋呉服店増築●(愛知) | 内国貯金銀行金沢支店●(石川) | 安藤商店●(愛知)
 大正11年[1922] 中外商業新報社●(東京) | 松坂屋いうと呉服店東京寄宿舎●(東京) | 十六銀行大垣支店●(岐阜) | 内国貯金銀行京都支店●(京都) | 岡崎市立図書館●(愛知)
 大正12年[1923] 名古屋銀行西陣支店●(京都) | 松坂屋大阪寄宿舎●(大阪) | 松坂屋大阪店(大阪) | 浜松銀行本店●(静岡) | 岡谷合資東京支店●(東京) | 名古屋銀行新栄町支店●(愛知) | 名古屋商業会議所●(愛知)
 大正13年[1924] 名古屋公衆図書館●(愛知) | いうと呉服店葵町舎宅●(愛知) | 中整銀行本店(愛知) | 名古屋銀行一宮支店(愛知)
 大正14年[1925] 松坂屋本店(愛知) | 名古屋放送局●(愛知) | 明治銀行京都支店●(京都)
 大正15年[1926] 名古屋銀行本店(愛知) | 松坂屋城山舎宅●(東京)
 昭和3年[1928] 森田病院●(愛知) | 松坂屋大阪店増築(大阪)
 昭和4年[1929] 松坂屋上野店(東京) | 野沢屋増築(神奈川県) | 愛知淑徳高等女学校●(愛知) | 東邦電力(株)名古屋営業所●(愛知) | 揚輝

荘伴華楼(愛知) | 向洋館●(愛知)
 昭和6年[1931] 伊藤銀行本店●(愛知) | 日銀名古屋支店増築●(愛知) | 岡谷商店●(愛知) | 高原商店ビル(徳島)
 昭和8年[1933] 豊田喜一郎邸(移築、愛知) | 岡本邸●(東京)
 昭和9年[1934] 松坂屋大阪店増築(大阪) | 野沢屋増築(神奈川県)
 昭和10年[1935] 宇治山田商工会議所●(三重) | 名古屋商工会議所増築●(愛知)
 昭和11年[1936] 名古屋弁護士会館●(愛知) | 名古屋中央社会館●(愛知)
 昭和12年[1937] 十一屋増築●(愛知) | 野沢屋増築(神奈川県) | 日本陶器工場および事務所(愛知) | 松坂屋本店増築(愛知) | 松坂屋大阪店増築(大阪)
 昭和13年[1938] 名古屋製陶鳴海工場および事務所●(愛知) | 日東石膏(株)工場●(愛知)
 昭和14年[1939] 東邦瓦斯熱田工場●(愛知)
 昭和15年[1940] 桜菊女学園校舎●(愛知)
 昭和16年[1941] 愛知時計電気(株)永徳工場●(愛知)

取材協力: 雨田光弘/岡崎信用金庫資料館/財団法人桐華学園桐華家政専門学校/財団法人諸戸会/昭和土木事務所/積水ハウス/竹中工務店名古屋支店/東京大学工学部建築学科/東京都雑司ヶ谷霊園管理事務所/名古屋工業大学/名古屋工業大学教授 河田克博/名古屋市公会堂/夏目房之介/日本建築学会/松坂屋/三菱地所
 参考資料:「日本の建築 明治大正昭和8 様式美の挽歌」伊藤三千雄・前野崑著[三省堂/1982]/
 「鈴木楨次及び同時代の建築家たち」瀬口哲夫・20世紀の建築文化遺産展実行委員会編著[20世紀の建築文化遺産展実行委員会/2001]
 その他:特記のない写真は撮り下ろしです
 次号予告:「INAX REPORT No.181」の「続・生き続ける建築」は遠藤新です